

病害虫発生予察情報予報第 2 号 (6 月の予報)



佐賀県農業技術防除センター


6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。


1. 農薬の使用前には、ラベルの内容を確認しましょう。
2. 農薬は、ほ場面積等に応じた必要量を調整し、残りが出ないようにしてください。万一、残った場合でも、水系に廃棄してはいけません。
3. 農薬の散布においては、周囲への飛散を避けるため、風向きに注意して下さい。また、強風時の散布は控えましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	6 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
(早期) 水稲	葉いもち	やや多	多	126～135 137～142	 いもち病
	イネミズゾウムシ	並	やや多	170～171	
(早植え) 水稲	葉いもち	やや多	やや多	126～135 137～142	
	イネミズゾウムシ	並	並	170～171	
水稲 (普通期)	葉いもち	やや多	やや多	126～135 137～142	
	スクミリンゴガイ	やや多	やや少	162～168	
<p>1. もみ枯細菌病・白葉枯病 もみ枯細菌病が育苗箱で発生した場合や白葉枯病の常発圃場では、これらに登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。</p> <p>2. スクミリンゴガイ 暖冬傾向で推移したことから、越冬率がやや高いと予想され、今後の降雨等の状況次第では、本年も大きな被害が生じる恐れがある。被害を防ぐため、用排水路での貝及び卵塊の捕殺、移植後の浅水管理や薬剤防除等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、「佐賀県病害虫防除のてびき」および「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル (農水省 HP)」を参照する。</p>					
水稲全般	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	並	並	158～159	<p>1. いもち病 本年は、平年よりも 20 日程度梅雨入りが早く、向こう 1 か月の降水量も多いと予想されており、いもち病が発生しやすい条件となる。育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。移植後水田周辺に放置された予備苗は、いもち病の伝染源となるため、補植後は早急に取り除くとともに、本田での発生を確認したら、防除を実施する。</p> <p>2. ウンカ類 例年より早い時期からの飛来が確認されており、今後も断続的に飛来する可能性がある。育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。今後の飛来状況は農業技術防除センターのホームページ等で提供するため、最新の情報を確認するとともに、各地域、各圃場での発生状況を確認する。</p>

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	やや多	多	211~212	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	やや多	201~203	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	多	多	205~209	
	アブラムシ類	並	並	216~217	
<p>1. 炭疽病、疫病、萎黄病 健全苗を育成するため親株床から薬剤防除を実施し、発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。 特に炭疽病については、梅雨入りが早く、断続的な降雨が続いており伝染リスクが高まっている。寒冷紗展張よりも発病抑制効果が著しく高いビニル雨よけ下で育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。また、灌水を過度に行うと、高湿度条件が長時間維持され、発病が助長されるため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する（詳細は、5月24日付病虫害対策資料第3号参照）。</p> <p>2. ハダニ類 一部多発生圃場が見られる。本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5~7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。</p>					
アスパラガス	茎枯病	多	多	313~314	 ネギアザミウマ
	褐斑病	多	多	315	
	斑点病	やや多	多	314~315	
	アザミウマ類	やや多	並	317~318	
	ハダニ類	並	やや多	314~315	
<p>1. アザミウマ類 発生が急増している。さらに、今後は気温の上昇とともに周囲からの飛び込みも増えると予想される。虫見板への払い落とし等を行い、発生状況に注意し、早期防除に努める。</p> <p>2. 茎枯病、褐斑病、斑点病 梅雨入りが早く、これら病害の発生しやすい条件となっている。晴天日には施設開口部を開放し、通風を図る。 前年発生が多かった褐斑病は、発生前からの予防散布を実施する。特に、前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は対策を徹底する。 茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第除去し、適切に処分する。</p>					
施設果菜類	<p>1. アザミウマ類、コナジラミ類 施設内に残ったアザミウマ類やコナジラミ類の野外への拡散を防ぐため、栽培終了時に施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行い、これらの害虫を死滅させる。なお、次作の定植までの期間が短い作型であっても、日中の高温日を確保できるよう適切な密閉期間を設ける。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	並	やや少	250~253	
	1. 病害対策 本年は梅雨入りが早いので、降雨の合間をぬって早めの防除を行う。 2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。				
カンキツ	そうか病	やや多	やや多	220~222	 ミカンハダニ
	かいよう病	やや多	やや多	224~226	
	黒点病	やや多	やや多	222~224	
	灰色かび病	やや多	並	226~227	
	ミカンハダニ	少	やや少	234~236	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	238~247	
1. かいよう病 昨年は台風や強風雨があり、10月の調査においても一部圃場で発生を確認したため、園内の菌密度は高いと推察される。6月までは本病の重要な防除時期であり、今後の多発生を防ぐため、本病が発生しやすい園および幼木園では防除を徹底する。 2. 灰色かび病 本年は着花が多い園が多く、本病が発生しやすい条件となっている。傷果防止のため一次落果期に薬剤防除を行う。					
ナシ	黒星病	並	やや多	288~291	 ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	並	並	302~305	
1. 黒星病 6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬頃は主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。					
ブドウ	黒とう病	やや多	やや多	333~335	 ブドウ黒とう病
	べと病	やや多	やや多	336~338	
	褐斑病	やや多	やや多	338~339	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	345~346	
1. べと病 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。また、べと病の罹病葉は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する 2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
キウイフルーツ	1. かいよう病 6月まではすべての園において、銅水和剤を主体とした <u>定期的な薬剤防除を実施</u> する。特に幼木は成木に比べ発病しやすく影響が大きいいため、薬剤防除を徹底する。				 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	やや少	並	413~414	 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	やや少	並	420~421	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	419~420	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや少	418~419	
	チャノコカクモンハマキ	並	並	417~418	
	チャノホソガ	並	並	416	
	炭疽病	やや多	多	408~409	
<p>1. カンザワハダニ 多発生すると防除が困難となるため、二番茶の摘採に向け園内の発生状況の把握に努め、発生があった場合は二番茶の摘採前使用日数に注意して薬剤防除を行う。</p> <p>2. チャノホソガ 本年は、発蛾最盛期が平年より早くなっている。発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるのでこの時期に確実に防除を実施する。ただし、二番茶摘採園では、摘採前日数に注意し、新葉展開期に防除を実施する。</p> <p>3. ナガチャコガネ 二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）が、羽化期～成虫発生初期にあたり防除適期であるため、発生圃場では薬剤防除を実施する。</p> <p>4. 輪斑病、新梢枯死症 摘採等による葉や茎の傷口に病原菌が付着して感染するため、発生が多い圃場では二番茶の摘採直後に薬剤散布を行う</p>					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

6 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 3 年 5 月 20 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年より多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (23.5℃)	40	並
降水量	10	40 (327 mm)	50	多い

Ⅲ. 6月の予報

水稻（早期、上場地域）

定期調査12圃場
調査日：5月18日



定期調査圃場の様子

1. 葉いもち

[【 概要に戻る 】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項（水稻全般）参照。

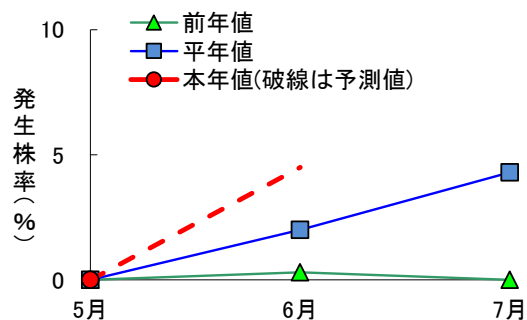


図1 早期水稻での葉いもちの発生推移

2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 食害株率：38.7%（平年31.8%、前年22.0%）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上確認されたら、薬剤防除を行う。

水稻（山間早植え）

[【 概要に戻る 】](#)

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和2年産の山間早植え水稻における穂いもちの発生は、平年よりやや少なかった。（-～±）

(2) 6月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項（水稻全般）参照。

2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1)前年の発生状況（越冬密度）
前年の発生は平年よりやや少なく、越冬密度は平年よりやや少ないと考えられる。〈一～±〉
 - (2) 6月の気象予報
気温は並で、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

水稲（普通期）

[【 概要に戻る 】](#)

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1)前年の穂いもちの発生状況
令和2年産の普通期水稲における穂いもちの発生は、平年よりやや少なかった。〈一～±〉
 - (2) 6月の気象予報
降水量は多く、多発生の条件〈+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 苗いもちの発生がみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。
 - (2) その他については、特記事項（水稲全般）を参照する。

2. スクミリンゴガイ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1)越冬状況（図1参照）
令和2年(2020年)12月～令和3年(2021年)2月の佐賀市の平均気温は7.6℃であり、平年(6.9℃:10年平均)よりやや高かったことから、水田内での越冬生貝率は平年よりやや高いと推定される。〈±～+〉
※過去の冬期の気温と翌春の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。
 - (2) 6月の気象予報
気温は並で、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)特記事項参照。

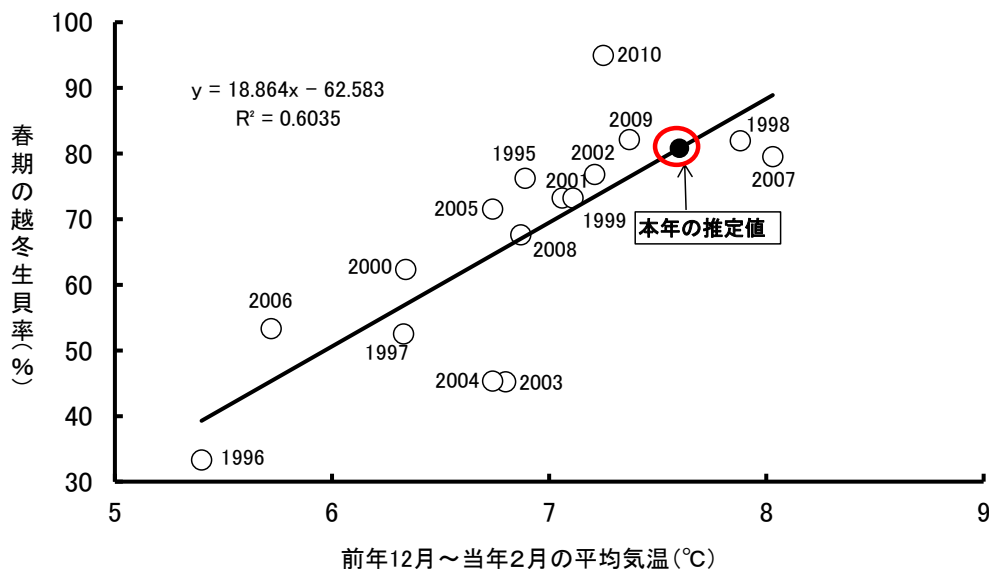


図1 冬期(12～2月)の佐賀市の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率(4月)との関係
 ○:1995～2010年の実測値(佐賀市の気温と、佐賀市内の同一水田における越冬生貝率。水田の越冬調査は、2010年で終了)
 ●:2020年12月～2021年2月の気温を用いて上記の関係式から推定した本年(2021年)春期の越冬生貝率

水稻（全般）

[【 概要に戻る 】](#)

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査(早期水稻)

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

② 小麦における20回すくい取り（第1表参照）

ヒメトビウンカ第1世代幼虫数25.1頭（平年24.3頭、前年18.1頭）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 近年の動向（第2表参照）

小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、近年やや低く推移している。

〈ー～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウンカを対象とした薬剤防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生
(令和3年5月14日)

調査地点	20回すくいとり虫数 (各地点2圃場平均) 頭
佐賀市1	6.0
佐賀市2	1.5
鳥栖市	7.5
神埼市	9.5
小城市	24.5
鹿島市	17.5
吉野ヶ里町	78.0
白石町1	67.5
白石町2	13.5
平均	<u>25.1</u>

第2表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
保毒虫率 (県平均)	1.3	4.2	0.9	1.0	0.0	0.3	0.0	1.1	0.3	0.3	0.5

注)5月中～下旬にヒメトビウンカを小麦圃場から採集し冷凍保存後検定を実施
(令和2年採集虫は保存後令和3年1月に検定実施)。

イチゴ (育苗圃)

定期調査 10 圃場
調査日：5月17～19日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：16.4% (平年3.1%、前年8.9%)

平年比：多<+> 前年比：多<+>

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量が多く、少発生の条件<->

3) 防除上注意すべき事項

(1)圃場によりハダニ類の薬剤感受性が異なるため、防除効果を確認し、薬剤を選定する。

(2)その他については、特記事項を参照。

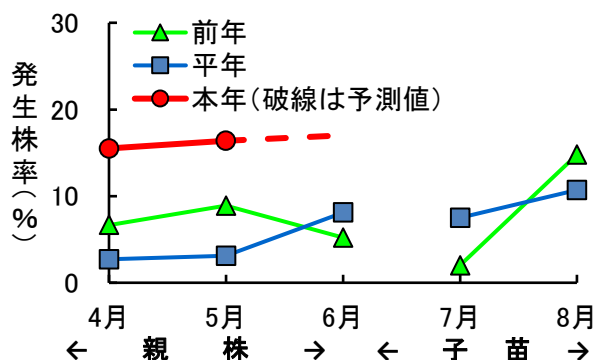


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年13.2%、前年1.3%)

平年比：少<-> 前年比：並<±>

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量が多く、多発生の条件<+>

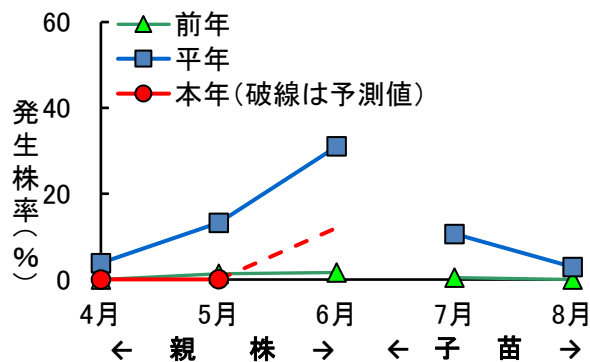


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 定期的な薬剤防除を実施する。

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

- 1) 予報の内容
 発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1参照）
 発生株率：0%（平年0%、前年0%）
 平年比：並（±） 前年比：並（±）
- (2) 6月の気象予報
 降水量が多く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

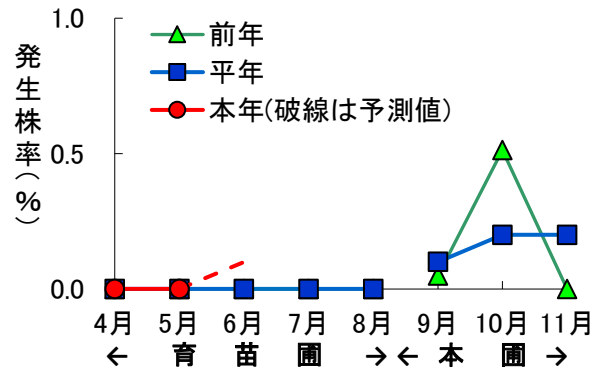


図1 イチゴ立枯症の発生推移

アスパラガス

定期調査 8 圃場
 調査日：5月17～19日



定期調査圃場の様子

1. 茎枯病

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
 発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1参照）
 発生茎率：0.6%（平年0.1%、前年0%）
 平年比：多（+） 前年比：多（+）
- (2) 6月の気象予報
 降水量が多く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

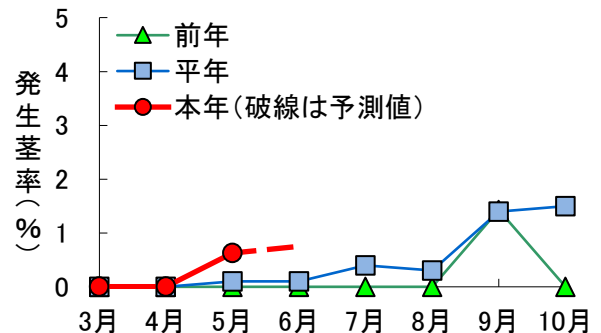


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

- 1) 予報の内容
 発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1参照）
 発生茎率：0%（平年0.1%、前年0%）
 平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
- (2) 6月の気象予報
 降水量が多く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

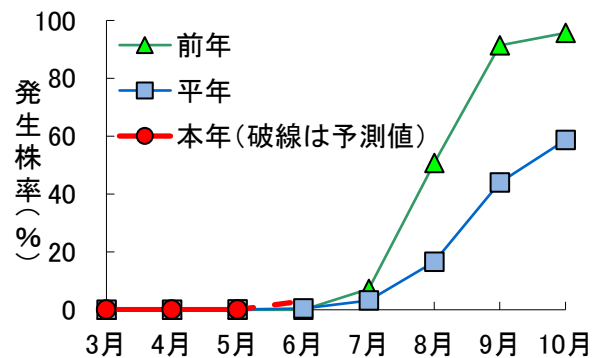


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生茎率：0%（平年0.7%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ② 6月の気象予報
降水量が多く、多発生の条件（+）
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

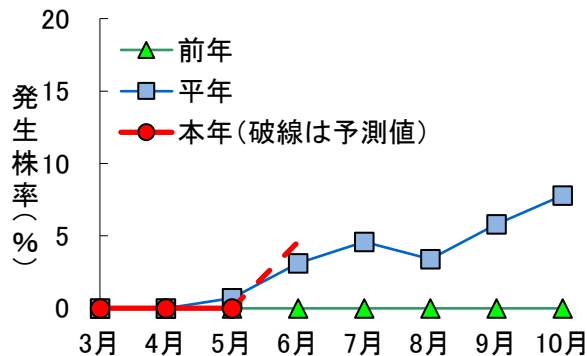


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：43.8%（平年33.8%、前年57.1%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：やや少（-～±）
 - ② 6月の気象予報
気温が並で、並発生の条件（±）
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

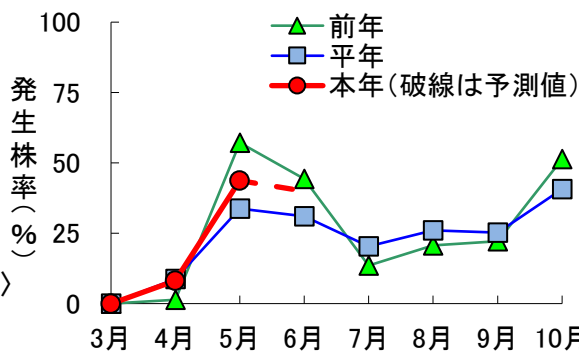


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

[【 概要に戻る 】](#)

1. カメムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査（表1）
 - ① 越冬地点率：18.8%（平年40.6%、前年75.0%）
平年比：少ない（-） 前年比：少ない（-）
 - ② 平均越冬虫数：0.12頭/m²（平年0.29頭/m²、前年0.60頭/m²）
平年比：やや少ない（-～±） 前年比：少ない（-）
 - ・ 地点別データ等は、令和2年度病害虫発生予察情報第12号（4月の予報）を参照。

(2) 発生の現況

①予察灯 (図1 参照)

平年比：並(±) 前年比：少(−)

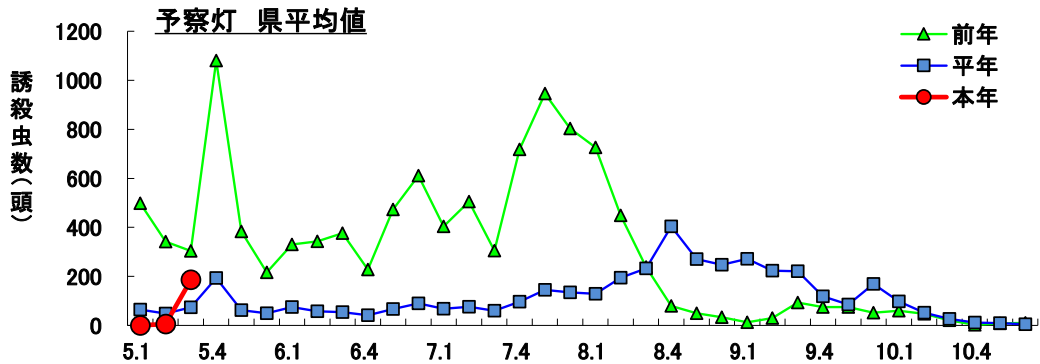


図1 予察灯 (佐賀市、小城市) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：やや多(±~+) 前年比：少(−)

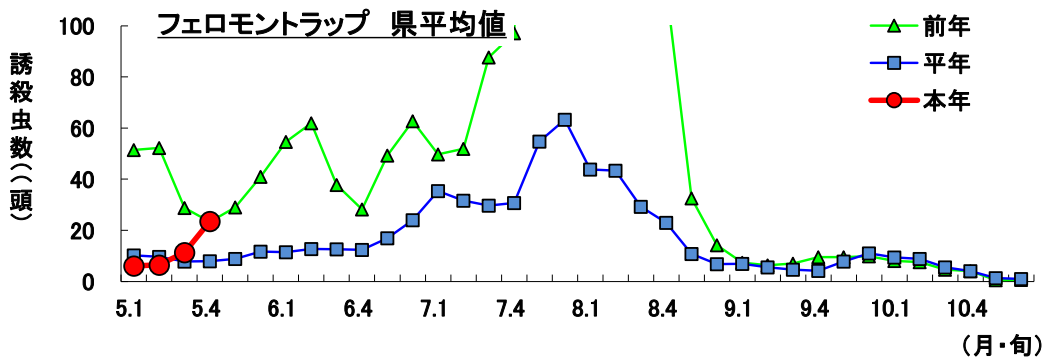


図2 フェロモントラップ (小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生状況は地域や園により異なるため、園内外を確認し、発生が確認されたら防除を行う。

カンキツ

定期調査 8 圃場
調査日：5月17~19日 [【 概要に戻る 】](#)



定期調査圃場の様子

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

(2) 6月の気象予報

降水量が多く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

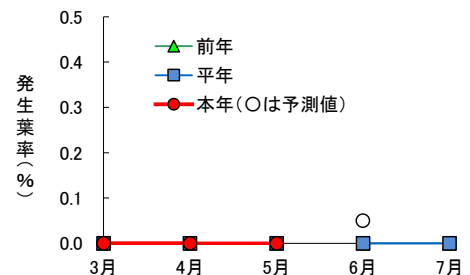


図1 カンキツそうか病の発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

- (1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。
ただし、1回目の散布から200mm以上の降雨があれば薬害を生じにくいいため、近接散布が可能である。

2. かいよう病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量が多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）など発生が問題となる園では、無機銅剤水和剤（クレフノン200倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は20～25日とする。
- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

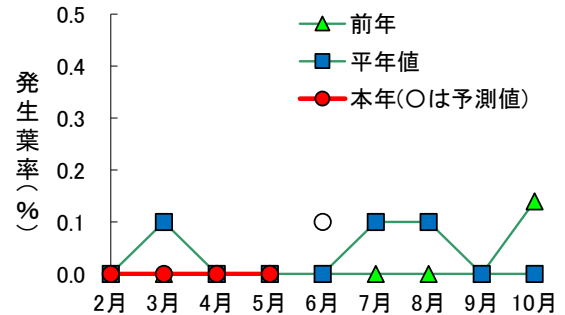


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 黒点病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 6月の気象予報

降水量が多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。
- (2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、累積降雨量が200～250mm（マシン油乳剤加用の場合は300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (3) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は抜根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

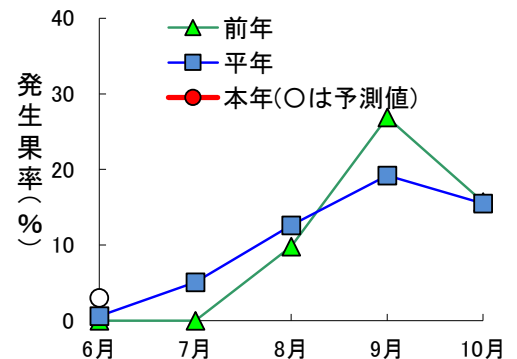


図1 カンキツ黒点病の発生推移

4. ミカンハダニ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：2.1%（平年6.4%、前年15.3%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量が多く、少発生の条件（-）

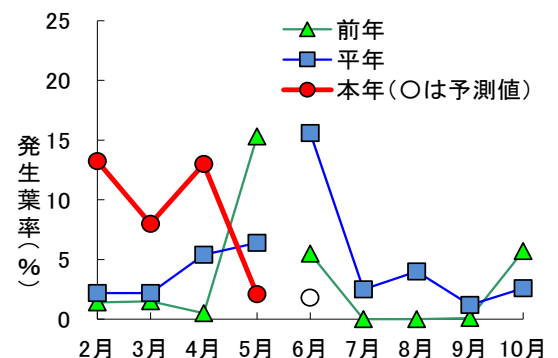


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率 30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭）に防除を行う。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照とする。

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

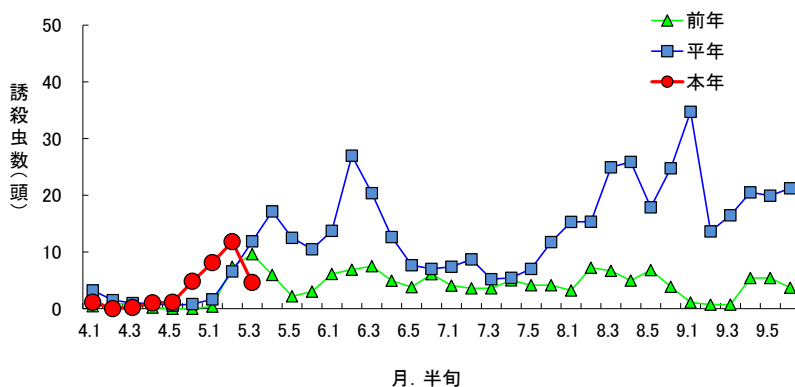


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温が並で、降水量が多く、少発生の条件（一）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、第2世代成虫の発生ピークは6月上旬頃にみられている。被害を防止するため、6月上旬までに薬剤防除を実施する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナシ

定期調査7園場

調査日：5月17日 [【概要に戻る】](#)

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.9%、前年0%）

平年比：やや少（一~±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年1.0%、前年0.2%）

平年比：やや少（一~±） 前年比：並（±）



定期調査園場の様子

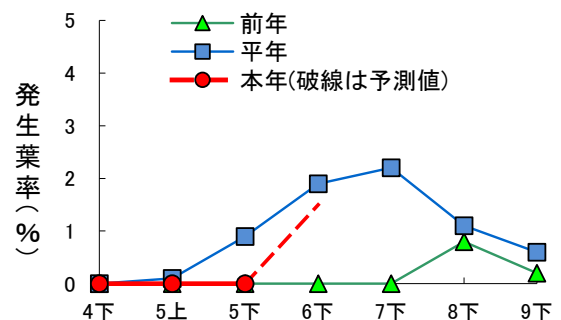


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

(2) 6月の気象予報

降水量が多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

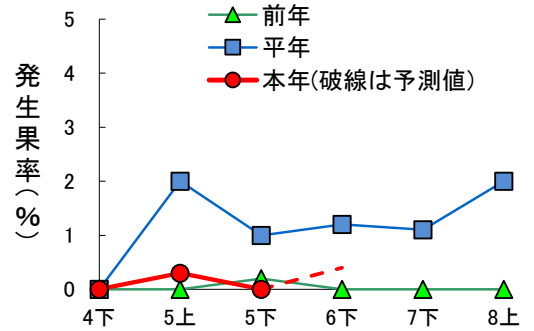


図2 ナシ黒星病(果実)の発生推移

2. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①県内に設置したフェロモントラップ (図1参照)

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

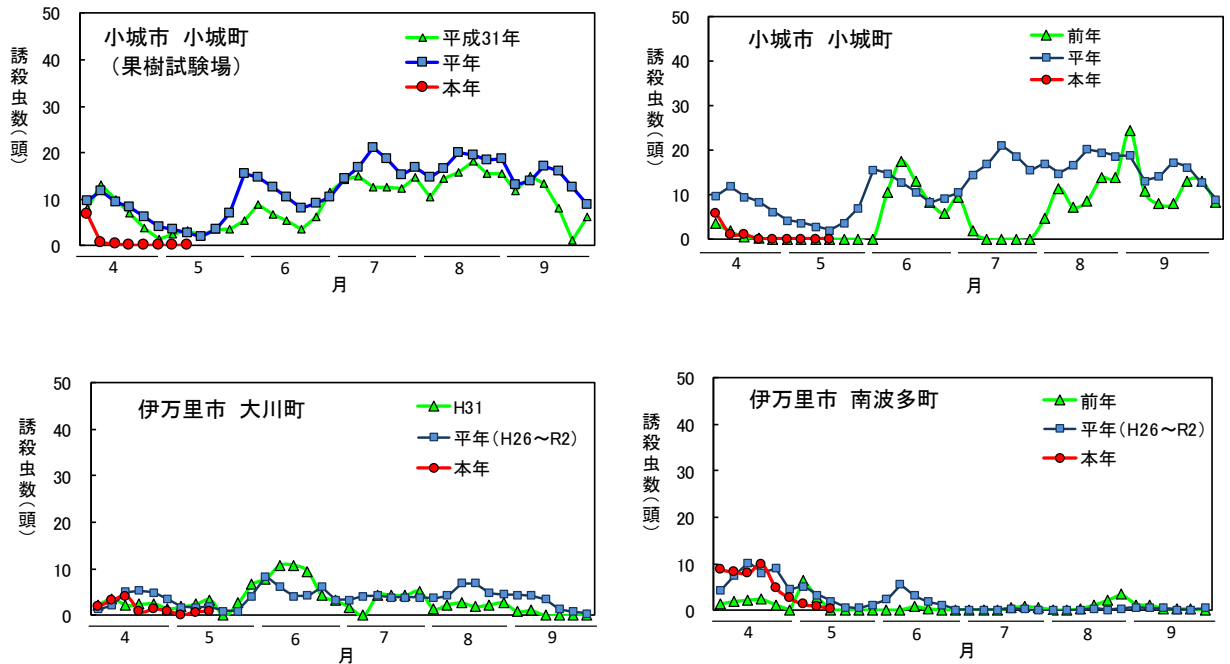


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移 (果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

ブドウ

定期調査6圃場
調査日：5月17～19日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

[【 概要に戻る 】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生葉率：3.8%（平年0.1%、前年0.2%）
平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉
 - ②6月の気象予報
降水量が多く、多発生の条件〈+〉
 - (2) 防除上注意すべき事項
罹病枝葉の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

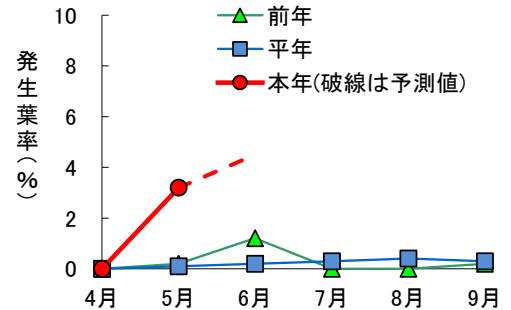


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生葉率：0%（平年0.1%、前年0%）
平年比：やや少〈-〜±〉 前年比：並〈±〉
 - ②6月の気象予報
降水量が多く、多発生の条件〈+〉
 - (2) 防除上注意すべき事項
ブドウベと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

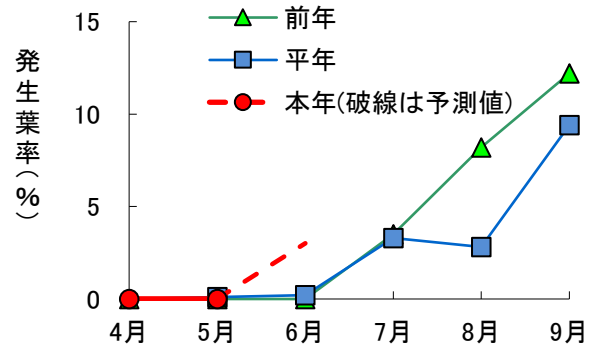


図1 ブドウべと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）参照）
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
 - ②6月の気象予報
気温が並で、降水量が多く、少発生の条件〈-〉
 - (2) 防除上注意すべき事項
6月中旬～7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。
袋内への侵入を防止するために、袋の締め口をしっかりと締める。



定期調査圃場の様子

1. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：8.4頭（平年8.5頭、前年9.3頭）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

②吸引粘着トラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

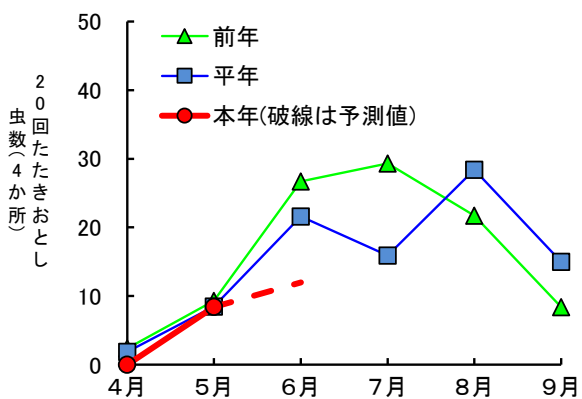


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

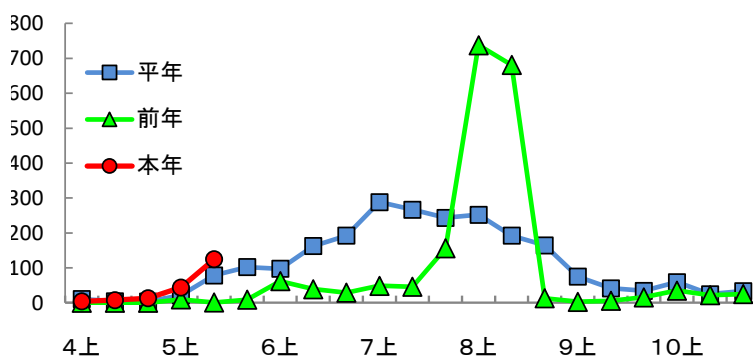


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温は並、降水量は多く、少発生の条件（-）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶萌芽～二番茶の開葉初期に防除を実施する。
(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. チャノミドリヒメヨコバイ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：1.4頭

（平年1.8頭、前年0.3頭）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶萌芽～二番茶の開葉初期に防除を実施する。
(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

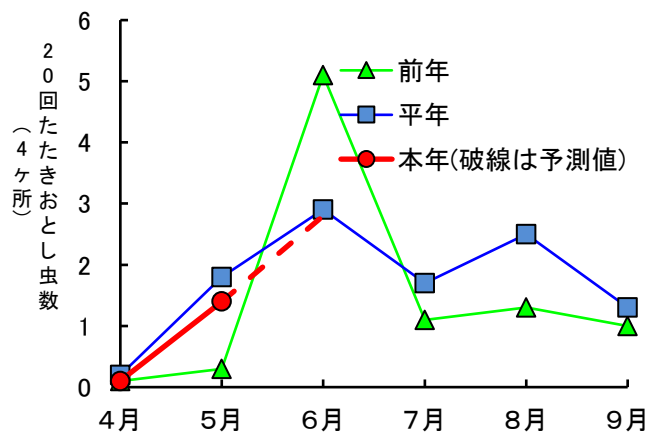


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

3. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

被害葉数：0枚/m²（平年0.8枚、前年0枚）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

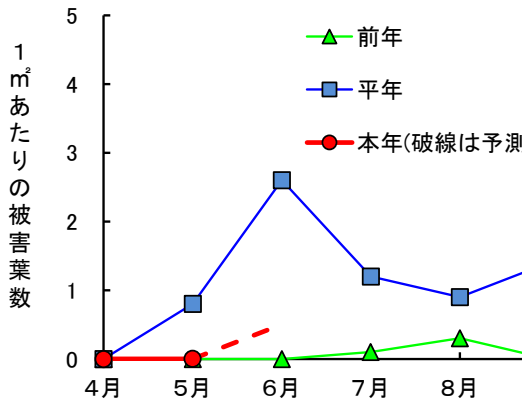


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

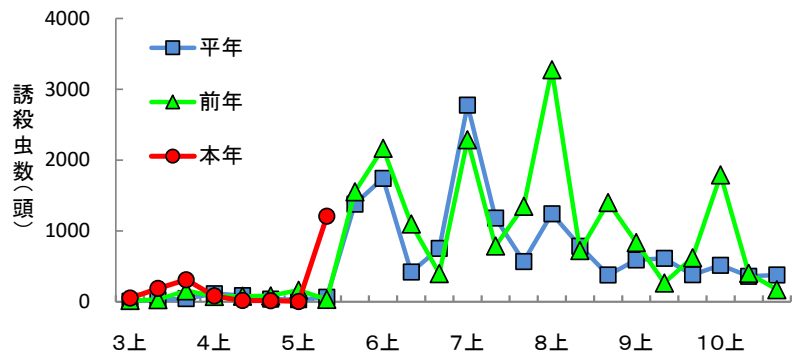


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照

4. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照、H30より5月調査追加）

発生葉数：0枚/m²（前年0枚/m²）

(2) 6月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 新芽開葉初期が防除適期となるので、この時期に薬剤散布を実施する。二番茶摘採後に枝条更新を行わない園では、確実に防除を行う。

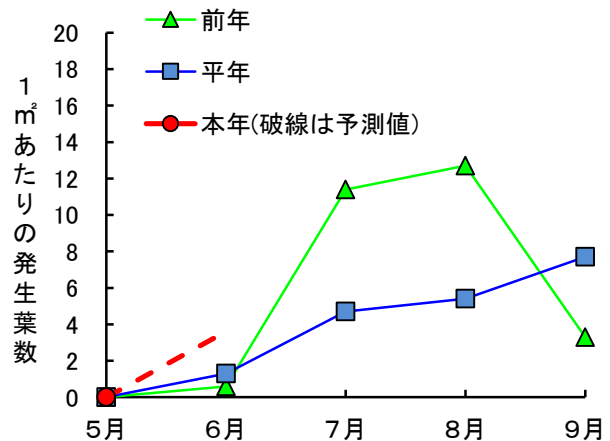


図1 炭疽病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

